

## 『私本太平記』の見読記

池田 隆

早朝からテレビで時代劇をやっていた。緒形拳やフランキー堺など懐かしい役者が現れる。三十年前の大河ドラマ『太平記』の再放送とのこと。藤村志保、沢口靖子、宮沢りえも登場、つい引き込まれる。ステイホームが叫ばれる時節柄、NHK オンデマンドで初回からゆっくり見たくなる。

原作は吉川英治の『私本太平記』、学生時代に新聞連載小説として歴史好きの母と毎日読んだものだ。合理的思考の持ち主だった母は学校で教わった南朝正統派の歴史には懐疑的で、朝敵尊氏を主人公とする小説に興味を抱いていた。尤もバサラ大名の佐々木道誉に強い印象を受けた以外、今の私は話の内容をほとんど覚えていない。この際小説とテレビを同時並行して見読（新語？）してみよう。

物語は北関東から北九州までの各地で展開する。いずれの地も一度は訪れたことがあり、話の舞台のイメージはすぐに湧く。人物像も小説だけでは想像を逞しくするほかに手はないが、テレビとのコラボのおかげで役者の顔が頭に即浮かぶ。一方役者の表情や演技だけでは分り難い内面的な心情は小説から細やかに読み取れる。筋書きをつなぐ遊女や忍者などの創作人物については、テレビ番組の脚本家が原作をかなり変更している。それに対しつい批判的な心情になるのは我ながら不思議だ。

小説は青空文庫で十三帖、テレビで四十九回に及び、完見読に二十日を要した。尊氏、直義、師直、後醍醐、正成、義貞といった主要人物に対し善悪一面的な見方でなく、人間的な弱さを掘下げている。筋書きも勝ったり負けたりの際り返しや寝返り、下剋上、策謀など今に通じる実社会の政争を挟っている。さすが著者が最晩年に書き上げた力作である。

今回あらたに興味を覚えた人物は阿野簾子である。後醍醐の准后で隠岐島遠流にも同行し、天皇没後は足利方と丁々発止の駆け引きを行い、南朝を陰で指揮した政治家である。北条政子や日野富子、淀君にも匹敵する。只の悪女という通説はこれまた疑わしいようだ。